【議事】定29

（1）宇宙開発に関する重要な研究開発の評価結果について

資料 29-1（準天頂衛星の事前評価結果）を青江 推進部会長が説明し、さほど深刻な議論もなく議決された。

部会長の説明は、本年 5 月の計画変更（民間の撤退）に始まり、検討時間不足により本年秋でないと「開発」段階に移行する審議を受ける資料が整わないこと、予算要求のために早急に評価する必要が有ること、そこで今「その 1」を行い、資料の揃う本年秋に「その 2」で再確認することに言及していた。

井口：最大の課題は色々の省庁が絡み、責任が明確でない点であった。これを一応整理できた[1]ことが重要である。

青江：第 1 段階までの実施体制をはっきりさせてきた。第 2 段階で 2 号機、3 号機を上げ、システムとして機能させるときの推進体制に努力を要する[2]。また、(準天頂システムは) ここに繋がらないと意味が大きく減退する。[3]このプロジェクトの意味のあるものにするよう、文科省の努力をお願いしたい。

森口：第一段階において文科省が取りまとめ役をするように整理がされた。第 2 段階を含め自民党で議員立法[4]の動きがあり、それに添った形で努力していきたい。

井口：異議が有りませんようですので決定とします。

---

[1] 内閣府主催の会議が公開されていないので、推論しかできないが、「整理できた」のではなく「整理して貰えた」のではないだろうか。宇宙で使うシステムを新規開発する技術は、日本で唯一 JAXA が保有している。それを監督する官は文科省である。従って、「準天頂衛星」の 1 号機の開発を担当するのは文科省・JAXA であることは議論を待たない。着手のときの経緯があるからといって、文科省と宇宙開発委員会が、このような引っ込んだ態度で良いのであろうか。

[2] 2 号機、3 号機を上げる段階では、技術開発要素が無くなるかもしれない。その場合は文科省中心で進めるのではない代案が登場する。その時も手放したくないと思っては居ないか。

[3] 推進部会で「或る特別委員」が発言したことを、多少和らげて表現している。しかし、これは間違った考えだと思う。「準天頂衛星」が技術的にフィージブルなのは、作ってみなくても判っている。静止軌道と同等の宇宙環境に耐える要素部品を使い、要求に見合った機能のサブシステム、サブシステムを纏めれば良い。やってみなければ判らないのは政治的、経済的フィージビリティである。これは 1 号機を上げて実際に運用し、データを得ることで検討が可能になる。データを推定してシミュレーションすることはできるが、実証することが重要になる。それが完了した後に、測量、被災地通信、被災地報道、被災者測位、など、補完・補強を利用し、通信・放送機能を利用するビジネスモデルを検討すれば良い。経済的にフィージブルであれば経産省主導の体制も考えられるし、政治的にフィージブルであれば総務省か国土交通省主導の体制も考えられる。測位でも、通信でも、全世界展開をしないわが国にとって、準天頂軌道は可能性を沢山持った資源と考えなければならない。

[4] 「拘束」を作るのを急ぐことより、「フィージビリティスタディの環境整備」が必要なのではないか。この 3 年間それをやってきたので、もうその段階ではないと云うことなのであろうか。